

保育学生の作り出すファンタジー

— タイトルから物語を広げるとき —

○小坂 圭子

樟本 千里

(日本学術振興会特別研究員・広島大学) (広島大学教育学研究科)

はじめに

幼稚園教育要領及び保育所保育指針において、保育者の援助のもとに子どもが身につけることが望まれる事項として「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5領域が掲げられている。従って、保育者養成を担う教育機関においては、以上の5領域に基づいて講義内容が設定されているといえる。保育者養成に携わる場合、そうした講義内容の実際、学生の取り組み、学生側に現れる何らかの変化などを検討し、必要があれば改訂、修正を加えて、よりよい講義の在り方を探っていくという不断的な努力が求められる。そうした理念のもとに、多くの教材研究が行われているところであるが、それらの研究を概観したところ、中でも領域「表現」に関わる「造形」や「音楽」についての教材研究は数多く見当たるが、それに比べて領域「言葉」に関わる教材研究は比較的少ないといえよう。本研究では、保育者養成系の教育機関で展開される領域「言葉」の授業内容の分析を探索的に試みることを目指した。領域「言葉」では、学生自身が「言葉」に関する課題に取り組み何らかの形にしてアウトプットするという授業形態にすることが難しいが、本研究では、学生にタイトルを呈示し、各自思うままに物語を創作するという課題を設定した。保育学生が紡ぎ出す物語とは、一体どのようなものなのであろうか。

研究方法

1. 調査対象者 M市内の福祉専門学校保育科2年生18名。回収可能であった17名(男性9名、女性8名)の作品が分析対象とされた。
2. 手続き 調査者が「言葉」の講義中に、「星を空に返す方法」(内田, 1989)を調査対象者に読み聞かせた後に、400字詰め原稿用紙を与え、同じ題名で物語を創作するよう求めた。物語作成に割く時間は30分、分量は原稿用紙1枚から2枚の間に収めるよう指示した。作成が終了した調査対

象者から随時原稿を収集した。「星を空に返す方法」とは、5歳10ヶ月の女兒が友達の家で絵本づくりをして遊んでいた時に作った物語であり、動物たちが力を合わせて空から落ちてきた星を空に返すまでの顛末が語られている。また、「星を空に返す方法」については、受講学生に対して読み聞かせを1回しただけであり、エピソード分析(内田, 1990)などについての説明は一切行っていない。物語作成において対象年齢の限定もなかった。

結果と考察

1. 物語作成時間及び作成字数

物語作成に要した時間は平均約1時間であり、作成字数は平均約1080字(約600字-2400字)であった。400字詰め原稿用紙に約2枚半の分量である。日頃文章を書くことに抵抗を感じている調査対象者が、それまでになく熱心に取り組んでいた。中には、制限時間を過ぎても納得のいくまで作成を続けていた調査対象者もいた。

2. 誰の視点から描かれているか?

物語の主人公は、「星」(12%)もしくは「星以外」(88%)であり、「星以外」のほとんどが“やってきた星と出会って星を空に返そうと奔走する者”であった。これは、最初に読み聞かせた「星を空に返す方法」と同様の人物設定である。この結果と対応して、主人公が「星」の場合は「星以外」が準主人公として登場し(35%)、主人公が「星以外」である場合は「星」が準主人公となっている(65%)。

主人公が「星」の場合は、“空に帰りたい”主人公の望郷の念を中心に物語が進むことになるが、「星以外」が主人公である場合は、“なんとかして星を返してあげたい”という他者救助が物語の核となるため、必然的に登場人物も多くなり彼らの心の動きの描写も豊かになっている。また、主人公が「星」の場合は、その他の登場人物も「木」であるなど創造世界の中だけで物語が完結する傾向にあるが、主人公が「星以外」である場合は、彼ら主人公の多くは人間となっており、“ここで

はない向こうの世界から星がやってくる”ことと“こちらの世界にやってきた星を人間が助ける”ことがリンクすることとなり、非現実的な出来事と現実をつなげる(内田, 1990)というファンタジーの装置が活発に機能し始めることとなる(前者がファンタジーではないといっているのではない)。

3. 星がやってきた原因は？

どうして星がこちらに來たのかという点であるが、「落ちた」(65%) (遊んでいたら疲れて飛べなくなった、雨が続いてみんなの顔が見られなくて気分が悪くなった、遊んでいたら足をすべらせたなど)が最も多く、他には、「空から降りてきて散歩をしていて迷子になった」「お友達がいなくて寂しくて家出してきた」などが見受けられた。

4. 星を返す方法は？

「お母さんが迎えに來た」という顛末が2例あった以外は、内容の重複は見受けられなかった。調査対象者が各自でイメージを膨らませることのできる最たる部分であるということであろう。具体的には、「天の川の星に來てもらおう」「夜になると湖にやってくる星と一緒に帰る」「何百個という風船を膨らませて舟を作る」「七夕の短冊に願い事をする」「画用紙に星が空に帰る絵を描く」「空が映る水溜りに落とす」などがあった。

5. 星を返す方法を考えたのは？

基本的には、“やってきた星と出会う星を空に返そうとする主人公”であったが、彼らに助言を与える人物として“物知りの年長者”(かしの木、園長先生、町のみんななど)が登場する物語もみられた。また、主人公たちが一生懸命方法を考えたけれども、どれも失敗してしまい、途方に暮れていると星のお母さんが迎えに來たり、自然に星の体が浮かび上がったりと、主人公の努力が徒労に終わる物語もいくつかみられた(29%)。

6. 星からのお礼は？

“援助を得たら感謝を表す”という味付けであるが、“星が感謝する”という事態が可能な事例中何もなくしたのは14%であり、ほとんどが何らかの形で感謝の気持ちを表現していた。その多くは、「ありがとうと言って空に帰った後、空で輝く」というパターンであったが、中には、「主人公にいい事ばかり起こる」「主人公が幸せに暮らす」という目には見えない因果性を感じさせるファンタジーならではの結末も見受けられた。

7. 調査対象者の内面とのリンク

以下、2作品をピックアップしてあらすじを載せる。これらの作品は作者が自己の内面を見つめながら創作した物語ではないかと推測される。

作品 A) 主人公の男性が初対面の女性を相手に身の上話を始め、そのうち今は空に星がないことを語り始める。星はいつかは戻ってくるから、自分たちにできることは待つことだけである。空に星が帰ってきたらそのとき会いましょうと女性は立ち上がって別れる。

作品 B) ゆうちゃんはお友達とうまくお話できない女の子で、唯一の話し相手がお星さま。ある日ゆうちゃんを励ましにお星さまがやってきた。元氣になったゆうちゃんを見てお星さまは帰っていき、いつもゆうちゃんを見守っている。お星さまを返す方法とはゆうちゃんが元氣になること。

近年では、心理療法に物語作りを取り入れる試みが報告されている(宮下, 1999)。治療法として積極的に取り入れるという事態ではなくとも、その効用の可能性がうかがうことができる。

おわりに

今回の調査は、あくまで探索的なものである。今後、有益な教材研究へと発展させていくためには、対象を限定したうえでの創作、講義を受けた後の作品との比較、などを踏まえていくことが必須であることは言うまでもない。また、講義において、それぞれの作品についてディスカッションを行い、今回得られたような作品鑑賞のポイント、引いては自分の内省などを目指した授業内容を構成することも考えられる。加えて、今回得られた傾向が、保育科の学生に特徴的であるのかどうかについては、他学科学生と比較しなければ明らかにはされない。最後に、今回の調査対象者であった学生が非常に熱心に創作に取り組んでいたことを強調しておきたい。保育科の学生に限らず、大人が物語を創作することの意味も探索に値するテーマであると考えられる。

引用文献

- 宮下貞和 1999 心理療法としての物語作り:「相互物語作成法」を試みた一事例 心理臨床学研究, 17, 430-441.
内田伸子 1989 子どもの想像世界—物語ること・生きること 黒坂三和子(編) 子供の想像力と創造性を育む 思索社 Pp. 125-147.
内田伸子 1990 言語の産出 内田伸子(編) 新・児童心理学講座 6 言語機能の発達 金子書房 Pp. 183-221.

(KOSAKA Keiko・KUSUMOTO Chisato)